

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3771700832		
法人名	社会福祉法人豊中福祉会		
事業所名	グループホームとよなか		
所在地	香川県三豊市豊中町笠田竹田697-1		
自己評価作成日	平成25年11月1日	評価結果市町受理日	平成24年4月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaiyokensaku.jp/37/index.php?action=kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JiryoSyoyCd=3771700832-00&PrefCd=37&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人香川県社会福祉協議会		
所在地	香川県高松市番町一丁目10番35号		
訪問調査日	平成25年2月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

私たちグループホームとよなかは緑の田園と住民に囲まれて、大型スーパー、美容院、高校、幼稚園が隣接しているため、買い出しは日々、田園の中の季節感を味わいながらドライブし、利用者に新鮮な食材を選んでいただいている。利用者の「できる力」を活かし、食事であれば、切り込みをする人、盛りつけをする人、配膳をする人に分かれて、協力して作り上げることによって、お互いに役割を持ち、取り組んでいただいている。地域交流にも力を入れており、地域ボランティアをはじめ、近隣の自治会の住民を招待した「夏祭り」を開催し、成果をあげることができた。家族との連携をとるために定期的に家族会を行っており、それ以外でも月初めには、前月の状況報告を家族に送ったり、面会時には利用者の近況について報告するなど、こまめに連絡することで、職員と家族で共通認識を持ち、利用者の対応にあたっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点】

当事業所は、のどかな田園風景が広がる中において、同敷地内には特別養護老人ホームや老人介護支援センターなどが併設され、この地域の高齢者福祉の拠点となっている。このような環境の中、職員はサービスの向上に高い意識と情熱を持って毎日の支援に取り組み、サービス向上委員会をはじめとする委員会活動や個別の外出支援、家族への満足度調査、接遇の自己評価などを実施している。地域との交流にも力を入れており、昨年の夏には「わきあい愛会」と称し、多彩な催し物を企画し、地域からたくさんの参加があった。また、開設以来継続している家族会では、家族との意見交換はもちろん、家族同士の交流が活発に行われている。管理者をはじめ職員は、優しく温かい気持ちで利用者に接することを大切にするとともに、研修会への参加や勉強会を定期的に関開くなど、常に知識・技術の向上を心がけている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	グループホームとよなか(さくら)			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	豊中福祉会全体の理念とグループホームとよなかの独自の理念を定め、事務所に掲示している。朝礼時、唱和することで、常に理念を念頭に置いて入居者に接し、実践に努めている。	法人の理念に加え、事業所独自の理念として、「とよなか」の頭文字をとり、「ともに、寄り添い、仲良く、家庭的な雰囲気」という親しみやすく、わかりやすいものを掲げている。 さらに、それらを踏まえ、年間目標や身体拘束廃止委員会の目標もある。 理念や目標は、事務所に掲示し、朝礼時に唱和するとともに、サービス向上委員会の活動として自己評価を行ったり、家族への満足度調査等を実施するなど、理念の浸透に力を注いでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議メンバーに自治会長もおられるため、地域の奉仕作業に声をかけていただき、地域の一員として参加させてもらっている。今年度は夏祭りに、自治会の方々と地域のボランティアを招待して、出し物を披露していただいたり、楽しい時間を過ごすことで、交流が図れた。	5月の井出ざらえに始まり、年2回の空き缶拾い、また、自治会の話し合いに参加するなど、地域の一員として積極的に活動している。 昨年の夏には、「わきあい愛祭り」と称して、グループホーム独自でイベントを開催し、踊りや屋台、読み聞かせ、ミニ運動会などの多彩な催し物で、地域から数えきれないほどの参加があった。 自治会長には、運営推進会議の議事録を自宅へ持参し、日頃からコミュニケーションを取ったり、近所の人々が季節の野菜を持って来てくれたり、また、散歩や買い物の際には、地元の人への挨拶を心がけるなど、地域との日常的な交流が図られている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人内の介護教室で、認知症理解や支援方法の指導及び啓発を行っている。昨年は家族代表として、グループホームの家族が認知症についての話を下さる機会もあった。地域の行事参加の中で交流を図り、認知症への理解を深めている。		

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度定期的開催できており、メンバーには会議の意義や役割を理解してもらい、積極的に意見を出し合い、取り組みに反映させている。7月にはメンバーの方々に運営推進会議後、家族会、七夕行事に参加していただき、グループホームについて理解を深めていただいている。	2か月に1回、自治会長、老人会長、民生委員、地域代表、家族、地域包括支援センター職員等が参加し、定期的開催している。 事業所近隣で外出に適した場所等の情報はもちろん、参加者からは多くの意見が得られ、有用な機会になっている。	特にグループホームなどの小規模の事業所の運営においては、自己完結型ではなく、地域の様々な資源を活用しながら、利用者の暮らしを支えていくことが必要である。 限られた職員で現在のサービスの質を担保するために、運営推進会議等を通して、例えば、外出や調理、清掃等、日常生活を営む上で協力してもらえるボランティアの受け入れについて検討して欲しい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センターの職員に参加していただき、グループホームの取り組みや方針について周知報告を行い、情報交換したり、日頃より相談助言を受けている。	運営推進会議には地域包括支援センターの職員が参加してくれるので、その際に交流したり、また、市の担当者には直接、書類を提出しに行ったり、わからないことがあれば聞きに行っており、顔なじみの関係ができています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会が中心となり、勉強会を開催するとともに、目標を設定し、朝礼時に唱和している。職員全員が身体拘束による身体的、精神的弊害を理解し、日々のケアに実践している。	身体拘束について、勉強会などで理解を深めている。また、法人全体の身体拘束廃止委員会に、当事業所の職員が3名参加している。委員会では、各部署の取り組み状況の報告や「身体拘束ゼロへの手引き」の読み合わせ、指針の見直しなどを行っており、委員会で話し合われたことは、議事録等で職員に報告し、共有を図っている。 現在、玄関の施錠を含め、身体拘束の事例はない。 また、虐待防止の一環として、職員アンケートを実施し、その結果をもとに話し合うなど、虐待に関する職員の共通認識を図るとともに、職員のストレスとの関係にも鑑み、職場環境の改善に活かしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	同法人のリーダー職員が集まり、定期的な高齢者の虐待テーマについて検討して、ケア会議時に勉強会を開催し、理解を深めている。虐待が見過ごされないよう、職員全員へアンケートを行って、その結果を話し合い、課題に取り組んでいる。		

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	昨年より成年後見制度を利用されている入居者がいることから、研修参加者が伝達研修を行い、職員全体で学び、社会福祉協議会と連携をとっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書やパンフレットを使い、利用料金、解約、グループホームの特徴を説明している。ご家族の方に不明な点が残らないようにしている。十分な説明を行うことで、理解、納得していただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族会での意見、及び日頃の面会時でも家族とのコミュニケーションを密に取り、得た意見、要望は施設長に報告し、運営に反映させている。また、日頃から入居者の要望を聞き、サービス向上に努めている。	事業所開設当初から家族会を継続している。家族会は、2～3か月に1回、花見や七夕などの季節の行事に合わせて開催し、利用者、家族、職員で料理を作り、一緒に食事をしている。家族会を通して、家族同士の交流が深まり、また、この時に事業所からの周知事項や、旅行の行き先などの希望を伺うなど、家族からの意見や要望を聞く機会としている。 また、日頃から、家族の面会時に利用者の近況報告をするようにしており、その際に意見を聴いている。さらに月に1回、利用者の状況報告を書面で送付することで、家族との信頼関係の維持に努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のケア会議を行い、研修報告や意見交換を行っており、その場で出された意見や提案は早速に実施して、サービス向上に繋げている。	毎月1回必ず、職員全員が参加して行うケア会議では、活発な意見が出て、詳細な会議録として残されている。また、法人の施設運営会議に当事業所から3名出席し、その際、事業所としての意見を具申することができる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	目標参画、OJTシートを全職員対象に取り入れ、個々の目標、具体的な取り組み内容を明確化することで、各自がやりがいと向上心を持って働けるような職場環境を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修に多くの職員が参加しており、ケア会議で伝達研修を行っている。県の認知症実践者研修にも毎年1名の職員が参加し、修了課程を修めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会主催の研修に参加し、交流を図っている。また、去年は他のグループホームとの相互訪問を行い、管理者が訪問先のグループホームの特徴や概要を職員に周知、報告して、サービス向上に繋げている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人・家族と面談を行い、思いや要望を十分に伺い、ケアプランを作成している。ケアプランを家族に説明し、不安なことがあれば解消し、安心して入所していただくように支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居者及び家族の思いや意向を聞き、不安や困っていることを十分傾聴して受容し、じっくり話し合える関係を築くように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の思いや要望に耳を傾けて、現在必要としている支援を考え、状態に合った適切なサービスを見極めている。その都度家族へのアドバイスをを行い、納得できるように対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側、される側という意識を持たず、生活を共にしている関係と意識づけ、一緒に作業や家事等の活動を楽しみ、時には不安や苦しみを理解し、共感を築くように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会や行事などを通して、家族と本人が関わりを持てる機会を作り、こまめに連絡し、情報の共有に努めている。受診や外出の同行、正月、お盆の帰省をお願いし、職員と一緒に本人を支える役割を持ってもらえるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	長年馴染んだ習慣や好みを把握し、入居後も馴染みの美容院やかかりつけ医、地域のスーパーへの外出を支援するとともに、自宅への外出や外泊の援助を行い、馴染みの場所や関係が途切れないように努めている。	サービス向上委員会で個別ケアの充実に力を入れており、その一環で、本人や家族に馴染みの場所を聴いて、1か月に4～5人、担当者と一対一での外出支援に取り組んでいる。例えば、以前の勤務先を訪ねることで、現役時代の友人と偶然に会い、その友人が事業所に面会に来てくれたり、実家から母校の高校までの通学コースをドライブすることで、当時の風景が思い出されることもあり、利用者に懐かしさや喜びをもたらしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係性を理解し、その日の心身の状況や気分、感情の変化に注意し、入居者同士の関係が円滑になるように努めている。また、活動中にも孤立しないよう職員が間に入り、取り持つ配慮を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退居の際には、関係者に本人の状況、その他の情報を細かく伝え、契約が終了しても次の入居先や、家族からの相談や支援に可能な限り応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で入居者に声をかけて希望や思いを傾聴し、家族にも面会時、思いを聞いている。入居者本位の立場に立ち、支援できるように努めており、職員の思い込みにならないように、定期的に話し合いの場を持っている。	普段のケアを通して、利用者の思いや意向の把握に努め、記録し、職員間で共有を図っている。また、ケア会議では、その人になりきって、その人がどうして欲しいのか、真の希望を検討するようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今までの生活歴や在宅での馴染みの暮らし方、生活環境についてケアマネージャーや家族から情報を得ている。入居後も本人との会話からの情報を基に、安心できる環境を生活の中に取り入れるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の生活リズム、心身の状況を記録し、把握に努めている。関わりの中での気づきをセンター方式やひもときシートに記入し、職員全員で申し送り、情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族からの要望、職員の気づきを検討し、本人本位の介護計画が作成できるように努めている。モニタリングについても定期的にカンファレンスを行い、入居者の状況変化に随時合わせて、介護計画の見直しを行っている。	本人や家族の意見は普段の関わりを通して把握し、職員の意見はケアカンファレンスで情報交換することで、計画に反映させている。3か月ごとにモニタリング、アセスメントを行い、計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	認知症状や心身状態を日々細かく記入し、申し送りやカンファレンス等で職員間の情報共有を図り、日々の実践や介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域のボランティア訪問や職員との買い物、馴染みの美容院にも行っている。また、本人や家族からの要望に配慮し、かかりつけ医への受診を継続支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々に行事に参加していただき、交流の場を設けている。また、町の奉仕作業に参加、町の文化祭に作品を出展し、見学したり、近隣の高校の文化祭に見学に行ったりと地域の資源を活用している。		

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族の希望を重視し、家族の受診協力を得ながら、適切な医療が受けられるように支援している。また、入居者の健康管理をかかりつけ医と連携し、行えるように努めている。	入居以前からのかかりつけ医を基本とし、利用者の状態に応じて、家族に依頼したり、職員が付き添うなど、適切な受診に繋がるように努めている。受診結果はその日のうちに電話で家族に報告している。 看護師は配置されていないが、その分、利用者の些細な異変にも、大事を取って病院を受診するようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームに常勤の看護師はいないが、協力病院に日々の心身状態や情報を伝え、指示を仰ぎながら、適切な受診や看護を受けられるように支援している。同法人の看護師からの院内の研修を受け、知識向上を図っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が安心して入院治療できるよう情報提供を行い、定期的にお見舞いに行き、病院関係者との情報交換や相談を行い、早期に退院できるように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に「重度化に関するグループホームの方針」を十分説明し、支援の方向性について話し合いを行っている。その後の状態変化の際も、家族の意向に添えるように相談、支援を行っている。	入居時や家族会で、「重度化に関するグループホームの方針」を説明し、同意を得るとともに、状態の変化に応じて、早目早目に話し合うようにしている。看取りは、看護師の配置や浴室等の設備面から、基本的に行っていない。家族には受診状況を常に知らせ、入所施設への申込み状況等を確認している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の急変や事故発生時に対応できるよう、内部の研修を定期的で開催したり、救急講習を全職員が受講している。また、事故防止委員会の取り組みとして危険予知トレーニングを実施し、全職員が危険予知能力の向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練を行い、入居者の避難方法や対応を確認し、訓練後もカンファレンスを開催し、反省点や今後の取り組みを検討している。非常災害時の対応について、法人で防災委員会を設置し、マニュアル作成ができています。	年に2回、防災訓練を実施している。昨年11月の訓練では、早朝の出火を想定し、消火訓練、通報訓練、避難訓練及びスプリンクラー作動後の止水方法について実施した。備蓄は法人で準備している。	あらゆる災害を想定し、業務の状況や利用者の状態に配慮しつつ、できるだけ、シミュレーションや避難訓練等を実施することを期待したい。また、訓練の際、自治会からの参加を検討しているので、その実現を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	事業所内外の接遇研修に全職員が参加し、目上の入居者に対する適切な言葉遣いや対応について学び、実践している。プライバシーについても十分配慮できるよう、職員間で注意を喚起している。	外部の接遇研修に参加し、さらに事業所内で伝達研修を行うなど、利用者を尊重した言葉遣いや態度を心がけている。 利用者に対する威圧的な言葉があった場合は、職員同士で注意し合う環境作りが大切だと考え、取り組みつつある。 また、虐待の勉強会で理解を深めたり、職員のストレスケアの一環としてアンガー(怒り)マネジメントの研修も予定している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で入居者に寄り添い接する中で、本人の思いや希望で自己決定できるように心がけている。自分の思いを表わすことが困難な入居者については、表情やしぐさから思いを汲み取り、自己決定に近づけるよう努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎月のケア会議にて全入居者のカンファレンスを実施し、食事、入浴、レクリエーション活動、趣味活動の継続など、毎日の生活の中でその人らしい暮らしが送れるように全職員で検討し、実践している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ビューティーボランティアの訪問があり、美容部員の方の行うハンド、フェイスマッサージやネイルケアを参考にして、日々の生活でもおしゃれができるように支援している。また、ショッピングでは好みの洋服を購入する機会を持っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	近隣のスーパーに買い出しに行ったり、菜園で作った野菜をふんだんに使い、季節感溢れる食事作りを行っている。入居者一人ひとりの能力に応じて、調理、盛り付け、片付けの場面ごとに出番を作り、食事を楽しむとともにやりがいに繋げている。	菜園から、きゅうり、なす、トマト、ほうれん草、小松菜、水菜など、季節の作物を収穫し、食材として活用している。献立は、利用者の希望を取り入れながら職員が交代で作り、利用者の有する能力に応じて、調理から盛り付け、配膳、下膳、食器洗い等の一連の作業を手伝ってもらっている。 メニューは、旬のものや郷土料理、また、うどんなど、利用者に人気の高いものを取り入れ、職員も一緒に食事をとり、団欒を楽しんでいる。キザミ食などの個別対応もしている。 また、手作りのおやつで出来立てを味わったり、回転ずしや焼肉店などへ外食に出かけることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者一人ひとりの健康状態や咀嚼、嚥下、食事制限に合わせて、同法人の管理栄養士の指導のもと、食事形態、メニューを決定している。摂取量の確保が難しい入居者については、本人の嗜好品を提供し、週1回体重測定を行い、体重維持に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者一人ひとりの口腔状態に応じ、毎食後の口腔ケアの声かけ・見守りを行っている。口腔内のトラブルの際は、歯科の訪問が週1回あり、医師に相談し、治療を行っている。また、定期的に事業所外の研修に参加し、ケア会議の際、伝達研修を行い、知識の習得に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自尊心やプライバシーに配慮した声かけを行い、トイレ誘導を心がけている。個々の排泄パターンに応じてトイレでの排泄を促し、尿取りパッドの使用量の減少、下着への尿失禁を防ぐように支援している。	利用者個々の排泄パターンや排泄のサインを記録し、職員間で共有することで、排泄の失敗やおむつの使用を減らすように努めている。トイレ誘導はさりげなく声かけし、また、その人に応じた声かけで、プライバシーに配慮した支援に努めている。	

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の入居者の排泄状況を記録して把握している。スムーズに排便できるよう、野菜や食物繊維を多く含んだメニューとともに、散歩や軽体操で腸の蠕動運動を助けるように工夫している。また、便秘気味の入居者については乳製品を取っていただき、便秘予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人の希望に添い、毎日入浴を実施している。時間帯や個浴希望者、仲の良い入居者と入りたいなどの個々の要望を聞き、入浴を支援している。季節ごとにゆず湯や菖蒲湯などを楽しんでいただき、工夫してリラックスした入浴時間になるように心がけている。	入浴は毎日実施しており、毎日、もしくは2日に一度入る利用者がほとんどである。時間も利用者の希望に柔軟に応じている。広い浴槽を活かして、仲の良い利用者と一緒に湯船に浸かり、話に花が咲くこともある。ゆず湯や菖蒲湯など、季節感を味わえる工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調や行動パターンに応じて、日中の休憩や午睡を促している。昼夜逆転がないよう、日中の活動量を増やし、不眠が続く入居者については、受診時に主治医に相談し、心身の状態に応じて睡眠リズムが整うように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の服用している内服薬の効能、副作用を一覧表にしてファイリングし、把握に努めている。服薬は入居者に手渡し、服用の確認を行っている。内服薬の変更の際は、記録や申し送りノートに記入し、周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者個々の能力や得意分野を把握し、自身の力を発揮できるように役割を提供し、個々の希望に添ったレクリエーション活動や外出などの楽しみごとを通して、気分転換が図れるように支援している。		

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近所の散歩は車椅子を使用することで、全員が参加し、外気浴を楽しんでいる。また、定期的に外出や買い出しに行く機会を作り、全入居者がまんべんなく外出できるように支援している。	天気がいい日は、人員が確保できれば、できるだけ近所を散歩するようにしている。また、ドライブなども月に3~4回に分けて出かけ、全員が外出できるように配慮している。さらに、個別支援の一環で、利用者の希望の場所に担当職員と一対一で出かけている。時には、計画にとらわれず、テレビのニュースの情報をもとに、その日の希望で出かけることもあり、日常的な散歩に加えて、四季折々の外出、本人の希望を取り入れた外出など、新しく入手した車両を活用し、外出支援に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭はグループホームで管理しているが、少額の金銭を所持している方もいる。外出時は個々の能力に応じて、支払いできるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話は子機を使用している。プライバシーを確保し、居室での会話を楽しくるように促している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、掲示物も季節にあった上品な設えを工夫している。フロアはこまめな換気、空調に配慮し、行事や個別外出での写真を掲示し、居心地よく過ごせるように環境作りに努めている。	玄関に入ると色彩豊かな花が訪問者を迎え入れてくれる。事務所を挟んで左右にそれぞれのユニットがあり、ユニット間は自由に行き来でき、見通しがよい。食堂兼居間は、天井が高く、広々としており、ゆったりとした空間である。テーブルでは、利用者が料理の下ごしらえをしたり、作品作りに取り組んだり、思い思いに過ごしている。また、大型テレビやソファも置かれている。 壁面には、行事の際の写真や絵馬、書道などの手作りの作品が飾られ、季節感や生活感が漂う。また、保育園児が来訪した際の利用者の笑顔の写真が微笑ましい。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアのテレビ前にソファを設置し、暖かい日差しにあたる窓際にもテーブルと椅子を設置し、思い思いに過ごせるよう支援している。		

グループホームとよなか(さくら)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に衣類や家具、馴染みの生活用品をできるだけ準備していただき、居室が本人にとって安心できるスペースになるように支援している。	居室には、木製のダンスと机、椅子が備え付けられている。家族の写真などを持ち込んでいる利用者もおり、生活感や温かさが感じられる。馴染みのものを持ち込んでもらうよう家族にはお願いしているものの、比較的荷物は少ない。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレには表札をかけた、目印になる物をつけ、入居者が混乱しないようにしている。老人車や歩行器を使用している入居者が多いため、位置を決めて移動線を確保し、安全に生活が送れるよう工夫している。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します							
項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	グループホームとよなか(ふよう)			

自己評価結果

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
I. 理念に基づく運営			
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	豊中福祉会全体の理念とグループホームとよなかの独自の理念を定め、事務所に掲示している。朝礼時、唱和することで、常に理念を念頭に置いて入居者に接し、実践に努めている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議メンバーに自治会長もおられるため、地域の奉仕作業に声をかけていただき、地域の一員として参加させてもらっている。今年度は夏祭りに、自治会の方々と地域のボランティアさんを招待して、出し物を披露していただいたり、楽しい時間を過ごすことで、交流が図れた。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人内の介護教室で、認知症理解や支援方法の指導及び啓発を行っている。昨年は家族代表として、グループホームの家族が認知症についての話を下さる機会もあった。地域の行事参加の中で交流を図り、認知症への理解を深めている。
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度定期的に開催できており、メンバーには会議の意義や役割を理解してもらい、積極的に意見を出し合い、取り組みに反映させている。7月にはメンバーの方々に運営推進会議後、家族会、七夕行事に参加していただき、グループホームについて理解を深めていただいている。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センターの職員に参加していただき、グループホームの取り組みや方針について周知報告を行い、情報交換したり、日頃より相談助言を受けている。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会が中心となり、勉強会を開催するとともに、目標を設定し、朝礼時に唱和している。職員全員が身体拘束による身体的、精神的弊害を理解し、日々のケアに実践している。

グループホームとよなか(ふよう)

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	同法人のリーダー職員が集まり、定期的に高齢者の虐待テーマについて検討して、ケア会議時に勉強会を開催し、理解を深めている。虐待が見過ごされないよう、職員全員へアンケートを行って、その結果を話し合い、課題に取り組んでいる。
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	昨年より成年後見制度を利用されている入居者がいることから、研修参加者が伝達研修を行い、職員全体で学び、社会福祉協議会と連携をとっている。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書やパンフレットを使い、利用料金、解約、グループホームの特徴を説明している。ご家族の方に不明な点が残らないようにしている。十分な説明を行うことで、理解、納得していただけるように努めている。
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族会での意見、及び日頃の面会時でも家族とのコミュニケーションを密に取り、得た意見、要望は施設長に報告し、運営に反映させている。また、日頃から入居者の要望を聞き、サービス向上に努めている。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のケア会議を行い、研修報告や意見交換を行っており、その場で出された意見や提案は早急を実施して、サービス向上に繋げている。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	目標参画、OJTシートを全職員対象に取り入れ、個々の目標、具体的な取り組み内容を明確化することで、各自がやりがいと向上心を持って働けるような職場環境を作っている。
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修に多くの職員が参加しており、ケア会議で伝達研修を行っている。県の認知症実践者研修にも毎年1名の職員が参加し、修了課程を修めている。

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会主催の研修に参加し、交流を図っている。また、去年は他のグループホームとの相互訪問を行い、管理者が訪問先のグループホームの特徴や概要を職員に周知、報告して、サービス向上に繋げている。
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援			
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人・家族と面談を行い、思いや要望を十分に伺い、ケアプランを作成している。ケアプランを家族に説明し、不安なことがあれば解消し、安心して入所していただくように支援している。
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居者及び家族の思いや意向を聞き、不安や困っていることを十分傾聴して受容し、じっくり話し合える関係を築くように努めている。
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の思いや要望に耳を傾けて、現在必要としている支援を考え、状態に合った適切なサービスを見極めている。その都度家族へのアドバイスをし、納得できるように対応している。
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側、される側という意識を持たず、生活を共にしている関係と意識づけ、一緒に作業や家事等の活動を楽しみ、時には不安や苦しみを理解し、共感を築くように努めている。
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会や行事などを通して、家族と本人が関わりを持てる機会を作り、こまめに連絡し、情報の共有に努めている。受診や外出の同行、正月、お盆の帰省をお願いし、職員と一緒に本人を支える役割を持ってもらえるように努めている。

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	長年馴染んだ習慣や好みを把握し、入居後も馴染みの美容院やかかりつけ医、地域のスーパーへの外出を支援するとともに、自宅への外出や外泊の援助を行い、馴染みの場所や関係が途切れないように努めている。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係性を理解し、その日の心身の状況や気分、感情の変化に注意し、入居者同士の関係が円滑になるように努めている。また、活動中にも孤立しないよう職員が間に入り、取り持つ配慮を行っている。
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退居の際には、関係者に本人の状況、その他の情報を細かく伝え、契約が終了しても次の入居先や、家族からの相談や支援に可能な限り応じている。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント			
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で入居者に声をかけて希望や思いを傾聴し、家族にも面会時、思いを聞いている。入居者本位の立場に立ち、支援できるように努めており、職員の思い込みにならないように、定期的に話し合いの場を持っている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今までの生活歴や在宅での馴染みの暮らし方、生活環境についてケアマネージャーや家族から情報を得ている。入居後も本人との会話からの情報を基に、安心できる環境を生活の中に取り入れるように努めている。
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の生活リズム、心身の状況を記録し、把握に努めている。関わりの中での気づきをセンター方式やひもときシートに記入し、職員全員で申し送り、情報の共有に努めている。

グループホームとよなか(ふよう)

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族からの要望、職員の気付きを検討し、本人本位の介護計画が作成できるように努めている。モニタリングについても定期的にカンファレンスを行い、入居者の状況変化に随時合わせて、介護計画の見直しを行っている。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	認知症状や心身状態を日々細かく記入し、申し送りやカンファレンス等で職員間の情報共有を図り、日々の実践や介護計画の見直しを行っている。
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域のボランティア訪問や職員との買い物、馴染みの美容院にも行っている。また、本人や家族からの要望に配慮し、かかりつけ医への受診を継続支援している。
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々に行事に参加していただき、交流の場を設けている。また、町の奉仕作業に参加、町の文化祭に作品を出展し、見学したり、近隣の高校の文化祭に見学に行ったりと地域の資源を活用している。
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族の希望を重視し、家族の受診協力を得ながら、適切な医療が受けられるように支援している。また、入居者の健康管理をかかりつけ医と連携し、行えるように努めている。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームに常勤の看護師はいないが、協力病院に日々の心身状態や情報を伝え、指示を仰ぎながら、適切な受診や看護を受けられるように支援している。同法人の看護師からの院内の研修を受け、知識向上を図っている。
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が安心して入院治療できるよう情報提供を行い、定期的にお見舞いに行き、病院関係者との情報交換や相談を行い、早期に退院できるように支援している。

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に「重度化に関するグループホームの方針」を十分説明し、支援の方向性について話し合いを行っている。その後の状態変化の際も、家族の意向に添えるように相談、支援を行っている。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の急変や事故発生時に対応できるよう、内部の研修を定期的に行ったり、救急講習を全職員が受講している。また、事故防止委員会の取り組みとして危険予知トレーニングを実施し、全職員が危険予知能力の向上を図っている。
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練を行い、入居者の避難方法や対応を確認し、訓練後もカンファレンスを開催し、反省点や今後の取り組みを検討している。非常災害時の対応について、法人で防災委員会を設置し、マニュアル作成ができています。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援			
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	普段の関わりの中で、入居者一人ひとりの性格を把握し、プライバシーに配慮しながら対応できるように、言葉かけのタイミングを考えて行動している。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者が自己決定できるように職員は依頼型で声かけし、入居者が思いや希望を表わすことができるよう取り組んでいる。意思表示が困難な方に対しては、表情や仕草から希望を汲み取るようにしている。
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のリズムやペースを大切に、希望に添って支援している。入浴の時間、食事の時間にも個別に希望に添えるよう、柔軟な対応ができる体制を整えている。

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしさが失われないように、その人らしい身だしなみやお洒落ができるように支援している。お化粧品やネイル、バック等にも取り組んでいる。
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりのもてる能力を引き出し、調理、片付けまで参加されるように取り組んでいる。献立も入居者のリクエストや季節の旬の物を取り入れ、買い物も入居者とともにに行けるようにしている。また、天気のいい日はお弁当を作り、中庭でピクニックを行い、食事を楽しめるように工夫している。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	職員が入居者とともに食事することにより、好みや食事量、水分量を把握し、異変があれば職員間で共有している。摂取量に制限がある入居者の生活習慣を見直して検討し、栄養バランスについては、法人内の管理栄養士のアドバイスを受けている。
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの口腔状態や本人の能力に応じた口腔ケアを実施している。往診の歯科からアドバイスを受けて、口腔内の清潔保持に努めている。
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自尊心やプライバシーに配慮した声かけを行い、トイレ誘導を心がけている。個々の排泄パターンに応じてトイレでの排泄を促し、尿取りパッドの使用量の減少、下着への尿失禁を防ぐように支援している。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の入居者の排泄状況を記録して把握している。スムーズに排便できるよう、野菜や食物繊維を多く含んだメニューとともに、散歩や軽体操で腸の蠕動運動を助けるように工夫している。また、便秘気味の入居者については乳製品を取っていただき、便秘予防に努めている。

グループホームとよなか(ふよう)

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	自尊心やプライバシーに配慮した声かけを行い、トイレ誘導を心がけている。個々の排泄パターンに応じてトイレでの排泄を促し、尿取りパッドの使用量の減少、下着への尿失禁を防ぐように支援している。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調や行動パターンに応じて、日中の休憩や午睡を促している。昼夜逆転がないよう、日中の活動量を増やし、不眠が続く入居者については、受診時に主治医に相談し、心身の状態に応じて睡眠リズムが整うように支援している。
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の服用している内服薬の効能、副作用を一覧表にしてファイリングし、把握に努めている。服薬は入居者に手渡し、服用の確認を行っている。内服薬の変更の際は、記録や申し送りノートに記入し、周知している。
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者個々の能力や得意分野を把握し、自身の力を発揮できるように役割を提供し、個々の希望に添ったレクリエーション活動や外出などの楽しみごとを通して、気分転換が図れるように支援している。
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近所の散歩は車椅子を使用することで、全員が参加し、外気浴を楽しんでいる。また、定期的な外出や買い出しに行く機会を作り、全入居者がまんべんなく外出できるように支援している。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭はグループホームで管理しているが、少額の金銭を所持している方もいる。外出時は個々の能力に応じて、支払いできるように支援している。

グループホームとよなか(ふよう)

自己	外部	項目	自己評価
			実践状況
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話は子機を使用している。プライバシーを確保し、居室での会話を楽しめるように促している。
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、掲示物も季節にあった上品な設えを工夫している。フロアはこまめな換気、空調に配慮し、行事や個別外出での写真を掲示し、居心地よく過ごせるように環境作りに努めている。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアのテレビ前にソファを設置し、暖かい日差しにあたる窓際にもテーブルと椅子を設置し、思い思いに過ごせるよう支援している。
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に衣類や家具、馴染みの生活用品をできるだけ準備していただき、居室が本人にとって安心できるスペースになるように支援している。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活を送れるように工夫している	居室やトイレには表札をかけたり、目印になる物をつけ、入居者が混乱しないようにしている。老人車や歩行器を使用している入居者が多いため、位置を決めて移動線を確保し、安全に生活を送れるよう工夫している。